

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅終末期ケアにおける多職種連携の実態調査 (第 1 報) 多職種チームの状況
演者名	福井小紀子 1)、藤田淳子 1)、乙黒千鶴 1)、辻村真由子 2)、池崎澄江 2)、板垣園子 3)
所属	1) 日本赤十字看護大学地域看護学領域 2) 千葉大学大学院看護学研究科 3) チームもりおか

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5

目的

在宅終末期ケアの充実のために、医療と介護を含めた多職種連携が重要である。そこで、本研究では、在宅終末期ケアの事例を担当したチームメンバーへの調査を行い、様々な角度から多職種連携の実態を明らかにすることを目的とした。第一報では、多職種チームの状況について報告する。

方法

協力が得られた 3 地域(長野県須高地域、大分県別府市、岩手県盛岡市)において、在宅ケアを受けて亡くなった利用者を担当したチームメンバー 4 職種(医師、訪問看護師、ケアマネジャー、介護職)に質問紙調査を実施した。利用者の条件は、平成 24 年 4 月～平成 25 年 8 月の期間に、在宅ケアを 2 週間以上受けて亡くなった人(自宅死もしくは入院後 3 日以内の死亡)とした。調査内容は、①4 職種の属性、②利用者の概要、③チームの連絡手段、④チームの 10 段階評価(満足度、やりがい、再結成意向)であり、統計解析ソフト SPSS を用い単純集計を行った。本研究は、研究者の所属大学倫理審査委員会の承認を得て、平成 25 年 10 月～12 月に調査を実施した。

結果

63 事例分の回答が得られた。①4 職種の属性は、多職種連携研修参加が 76～96%、在宅看取り経験者は 82～91%であった。②利用者の概要は、がん 39 例 (62%)・非がん 24 例 (38%)、平均年齢 83.4 (±10.0) 歳、要介護度 4・5 が 40 例 (63%) であった。③チームの連絡手段は、IT 活用 26 例 (41%)、共通書式活用 12 例 (19%) などであった。④チームの 10 段階評価の平均値は、7.8～8.3 であった。介護職は、どの項目も他職種に比べ低かった。

考察

本研究の対象者は、連携や看取りの経験が高かったが、チームの評価について、介護職が他職種に比べて低いことから、介護系職種にとってのチームのあり方について今後検討していく必要があると考える。